

The International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers (Montpellier, FRANCE; September 22-24, 2010)

(『コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議』フランス・モンペリエ 2010年9月22-24日)
報告書

【参加・発表した『交替劇』A02 班関係者】

寺嶋秀明 (神戸学院大学・人文学部)

市川光雄 (京都大学・名誉教授)

Barry S. Hewlett (ワシントン州立大学・人文学部)

林 耕次 (神戸学院大学・ポストドクトラルフェロー ※当時は京都大学所属)

2010年9月にフランス南部の中心都市のひとつであるモンペリエで、初めの開催となった『コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議』では、『交替劇』A02 班(「狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の特性の実証的研究」)に関わる4名が参加し、各自発表に臨んだ。

ICCBHG とは

『コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議 (The International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers)』は英語の頭文字をとって、ICCBHGという略称で呼ばれた。参加したのは、文字通りアフリカ中央部のコンゴ盆地に生きる狩猟採集民を専門にしている人類学者のほか、考古学や遺伝学、自然科学など関連諸分野の研究者であった。今回、初めての開催となったICCBHGは、それまで四年おきに定期開催されていた『狩猟採集社会会議 (The Conference on Hunting and Gathering Societies; CHAGS)』に代わるものとして位置づけられていると言ってよいだろう。CHAGSは、1998年の大阪・国立民族学博物館での開催、2002年英国エディンバラでの開催以降、諸々の事情により開催が停滞している。移りゆく狩猟採集民社会の動向について、世界中の研究者が一堂に集まって最新の情報や研究成果を直接共有する機会を望む声は以前から高まっていた。とくに、コンゴ盆地における狩猟採集民をめぐる近年の状況は大きく変貌している。そうした背景を含みつつ、このICCBHGでは、各フィールドで現地調査を続ける若手の研究者を中心とした多地域・多方面の分野からの研究発表が相次いだ。

会議の様子

記念すべき第一回目の大会となるモンペリエでの大会では、主催者のひとりである Edmond Dounias 博士 (モンペリエ・フランス国立科学研究センター; CNRS) がオーガナイザーとなって開催された。Dounias 博士の他、米国・ワシントン州立大学の Barry S.

Hewlett 教授、富山大学 人文学部の竹内潔准教授が運営の中心となった。参加者のうち、地元フランスを含む欧州の研究者、アメリカのHewlett 教授の研究グループを中心とした研究者、京都大学を中心とした日本からの研究者も多数（11名）参加した。会議では、アメリカと日本からの研究者に配慮して、原則、英語が使用言語とされた。フランス語を母語として発表する場合でも、口頭かディスプレイのいずれかには必ず英語を使うことが義務とされた。また、三日間におよぶ長丁場の会議であったが、事前に発表内容のアブストラクトと発表のスライドがネット上に公開されたことは参加者にとって便利だったと思われる。

モンペリエでの大会は、9月22日から24日まで開催された。口頭発表では、S. Bahuchet 博士（フランス国立科学研究センター、フランス国立民族自然史博物館）による基調講演につづき、11のセッションで合計47の発表があった。また、ポスター発表では、6つのテーマに分かれ10の発表があった。発表内容では、いわゆる「ピグミー」と総称されるコンゴ盆地の狩猟採集民を対象としたものが大半を占めたが、テーマは近年の動向を交えた社会的文化的変容に関するものが多い傾向にあった。なお、アフリカ・カメルーン共和国からは世界的なNGO組織であるWWF（世界自然保護基金；World Wide Fund for Nature）の現地関係者も数名参加していたが、自然保護活動をめぐる自らの正当性を訴える発表・発言が印象的であった。

『交替劇』に関連した発表

会議では、『交替劇』A02班の関係者も発表に臨んだ。発表者と題目は以下の通りである。

・寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部）

The Children of Hunter - Gatherers, the Way of Learning and the Evolution of *Homo sapiens* (Poster)

・市川光雄（京都大学・名誉教授）

Historical Ecology and Contemporary Problems in the Congo Basin Forests

・Barry S. Hewlett（ワシントン州立大学・人文学部）

- 1) Recreational Drug Use as Potential Protection Against pathogens: Smokers among Central African Foragers have Fewer Worms than Non-Smokers
- 2) Social and Structural Characteristics of Breasueeding among the Aka and Bofi Foragers and Ngandu and Bofi Farmers: A Bio-Cultural Approach

（※いずれも共同研究者として連名）

・林 耕次（神戸学院大学・ポストドクトラルフェロー ※当時は京都大学所属）

Daily activities among the Baka Hunter-gatherers of Cameroon: From Individual Observations at the Forest Camp and the Settlement

『交替劇』A02班代表者の寺嶋教授は、ピグミー系狩猟採集民の子どもを含めた世界各地の狩猟採集民の子どもを対象に、『交替劇』プロジェクトのテーマに即したポスター発表を行った。自身が提供するデータの他、A02班の班員である窪田、今村、大村、亀井各氏の資料を盛り込んだもので、こうしたコンゴ盆地以外の狩猟採集民を比較した発表は、参加者の興味を集めるものであった。

他方で、『交替劇』プロジェクトに関連した、「子ども」「遊び」「学習」をキーワードとした発表も散見した。そのいくつかを以下に紹介する。

・ **Cooperation and Child Growth among Aka Foragers**

Meehan, Courtney L. and Helfrecht, Courtney (Washington State University)

コンゴ共和国のアカ・ピグミーを対象とした子育ての協調と子どもの成長に関する発表。育児期間において、どのような人が関わるかによって子どもの成長や発達、健康等に及ぼす影響について検証した。

・ **The Prominence of Other Children in Culture Learning During Aka Forager Early through Late Childhood**

Boyette, Adam Howell (Washington State University)

年齢や性別の異なる子どもたちが互いに干渉することで、文化的社会的な知識と経験を日常の生活から習得していくことを、同じく、コンゴ共和国のアカ・ピグミーを対象とした調査資料から提示した。

・ **Aka Foragers as a Baseline for a Hunting-Gathering Model of Adolescence**

Hewlett, Bonnie (Washington State University)

これまで狩猟採集民の子どもに関する研究が、おもに幼年期の子どもと母親の関係に注目されてきたことを受けて、アカ・ピグミーの10歳から20歳までの年齢層に着目し、青年期の行動分析を通して彼らの社会的成長などを検証した。

以上に紹介した三つの研究発表は、いずれもBarry S. Hewlett博士の所属する米国・ワシントン州立大学からの参加者によるものであった。コンゴ盆地における狩猟採集民の子どもを対象とした研究の先駆者として知られるHewlett博士のもとで、同一の地域・民族を対象とした多岐にわたる研究の展開が示された。

日本の研究者による発表では、ピグミー系狩猟採集民の権威でもある市川光雄氏による歴史生態学を土台とした発表をはじめ、異なるピグミー系のグループ、調査地域における人類学を基盤としたアプローチを中心に、生業、社会関係、コミュニケーション、ヘルスサイエンスなどの多様なテーマが扱われ、世界的にも層の厚い研究者が集まる勢力であることがアピールできたと思われる。

ベテランの研究者にとっては、懐かしい友人に再会する場であり、若い研究者にとっては、将来に引き継がれるであろう貴重な人脈を築く場でもあった。今後とも、このような会議が定期的開催されることを期待したい。

(参考) The International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers (ICCBHG)の
公式ホームページ : <http://www.cefecnrs.fr/ibc/Conference/ICCBHG.htm>
プログラム : http://www.cefecnrs.fr/ibc/Conference/ICCBHG_Final_Program.pdf
発表要旨 : http://www.cefecnrs.fr/ibc/Conference/ICCBHG_Final_Abstract_book.pdf

以上、文責・林 耕次 (神戸学院大学・研究協力者)

【参考・ICCBHGの様子（撮影：林 耕次）】



（会場前の看板。モンペリエのフランス国立科学研究センター（CNRS）内ホールで開催された。）



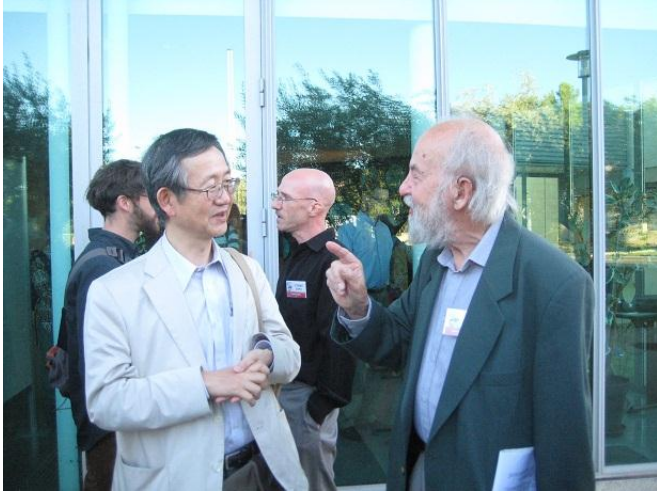
（寺嶋教授によるポスター発表の様子。）



（口頭発表に臨む林。右手は、座長を務めた会議主催者 E. Dounias 博士。※撮影は共同研究者の山内太郎 北海道大学准教授。）



（初日終了後の懇親会で。左より B. S. Hewlett 教授、L. L. Cavalli-Sforza 博士、市川光雄氏。）



(久しぶりの再会。寺嶋教授と狩猟採集民研究の泰斗である J. Woodburn 博士。)